

[書 評]

Nicola Polloni

*The Twelfth-Century Renewal of Latin Metaphysics: Gundissalinus's  
Ontology of Matter and Form*

Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 2020, pp. xiv + 318,

ISBN: 978-0-88844-865-1, 158.8 x 25.4 x 235mm, \$95.00

---

石田 隆太

本書は、12世紀に活躍したドミニクス・グンディサリヌスの存在論がもつ独自性を哲学的に位置づけようとする試みである。トレドにおいてアラビア語文献をラテン語に翻訳する活動に従事していた彼は、哲学者としてもラテン語による形而上学の体系を構築した。本書の最も中心的な主張は、グンディサリヌスがイブン・ガビロルの普遍質料形相論とアヴィセンナ（イブン・シーナー）の様相存在論の両方を受容する一つの独自の体系を築いていたことを積極的に評価することである。自らが翻訳した文献を含めて多数の文献をほとんどその典拠を示さずに引用していることから、グンディサリヌスの著作は単なる寄せ集めであり独自の思想を示すものではないと理解されることが多い。こうした理解を乗り越えることが本書の主な課題である。

本書の新規性は、グンディサリヌスの哲学的思想を主題とする他の研究書と比べても明らかである。マヌエル・アロンソ・アロンソの『中世哲学の諸テーマ：イブン・ダウドとグンディサリヌス』（*Temas filosóficos medievales: Ibn Dāwūd y Gundisalvo*, 1959）と木下登の『ドミニクス・グンディサリヌスの哲学的思想』（*El pensamiento filosófico de Domingo Gundisalvo*, 1988）という前世紀の研究に続けて、今世紀初頭にはアレクサンダー・フィドラの『ドミニクス・グンディサリヌスの知の理論：アリストテレス哲学の12世紀における第二の始まりの諸前提と諸帰結』（*Die Wissenschaftstheorie des Dominicus Gundissalinus: Voraussetzungen und Konsequenzen des zweiten Anfangs der aristotelischen Philosophie im 12. Jahrhundert*, 2003）が出版され、それに続くのが本書である。グンディサリヌスの存在論をここまで重点的に論じ尽くしているのは本書だけである。また、本書が英語で書かれていることも特筆に値する。著者はグンディサリヌスの思想

を概説的に論じた二冊の小著『境界の哲学者ドミニクス・グンディサリヌス』(Domingo Gundisalvo, *filósofo de frontera*, 2013)と『ドミニクス・グンディサリヌス入門』(Domingo Gundisalvo: *Una introducción*, 2017)をすでに出版しているが、グンディサリヌス研究はスペイン語によるものが多かった。フィドラの著書もスペイン語に翻訳されているほどである(Domingo Gundisalvo *y la teoría de la ciencia arábigo-aristotélica*, 2009)。その意味でもより多くの読者を獲得することが期待される本書について、以下では主に内容紹介をし、最後に少しだけ評者のコメントを付け加えたい。

第1章の前に置かれている「変遷の種を蒔く：歴史的な導入」は、グンディサリヌスに関して利用可能なデータを提示しながら、そこから浮かび上がってくる彼の生涯を描き出す。彼は、キリスト教徒(モサラベを含む)、ユダヤ教徒、イスラーム教徒が共存する文化を有していた都市トレドにおいてイブン・ダウドやヨハネス・ヒスパヌスとともにさまざまなアラビア語文献を翻訳したことで知られ、約20の哲学書を翻訳した(網羅的なリストが18n77にある)。ただし彼の生没年は不明であり、一定程度の確実性をもって言えるのは、トレドに赴く前にセゴビアに少なくとも13年間(1148年～1161/2年)いたこと、トレドにおおよそ20年間(1162年～1181年)いたこと、その後はおそらく再びセゴビアに戻ったこと、1190年にはまだ存命で1190年から1193年のあいだに死んだことである。これらにもとづいて彼の生年は1115年から1125年のあいだだと推測できる(15)。他に見解の分かれる大きな論点としては、グンディサリヌスが最初にセゴビアに赴く前にシャルトルで教育を受けていたかどうかがある。第2章にあるようにグンディサリヌスにはシャルトル学派の影響が窺えるが、グンディサリヌスがシャルトルにいた可能性について著者は最終的には否定的である(11-13)。

第1章「変容を開拓する：グンディサリヌスの哲学的考察」は、著者性に疑問の余地がある『魂の不死性について』(*De immortalitate animae*)や『諸学問について』(*De scientiis*)に関する短い考察を行ったうえで、著者性に疑いのない四つの主要著作を徹底的に吟味する。最も初期の『一性と一について』(*De unitate et uno*)からは、グンディサリヌスの形而上学的な思想が最初の時点でイブン・ガピロルの普遍質料形相論を採用していることが窺える。そこには、あらゆる被造物が質料と形相からなる複合体である一方で、創造主である神は絶対的に単純であり一であるという構図が存在している。次に『魂について』(*De anima*)という自らの著作で彼は、イブン・ガピロルのみならずアヴィセンナやクスタ・イブン・ルカを典拠にして魂に関する哲学的な考察を行う。魂の存在論的な側面についてはイブン・ガピロルの影響が強い一方で、認識論的な側面(魂の諸能力)についてはほとんどアヴィセンナに依拠している。クスタ・イブン・ルカはプラトンやアリストテレスによる魂の定義を伝える者として登場する。日本語訳も存

在する『哲学の区分について』(*De divisione philosophiae*)は、中世の学問論における古典の一つでもあり、学問としての形而上学を明確化することに一役買っている。最後に、『世界の発出について』(*De processione mundi*)は本書にとって最重要の著作である。ここで語られる存在論がまさに普遍質料形相論と様相存在論の両方に依拠している。その様相存在論は三つの存在様相を提示する。一つ目は自体的な必然存在 (*necesse esse per se*)であり、何らのものからも原因されない原因(つまり神)にのみ帰される。二つ目は可能存在 (*possibile esse*)であり、原因されるものすべてに帰される。存在と非存在の両方に開かれていることを意味する。三つ目は他のものによる必然存在 (*necesse esse per aliud*)であり、原因されるものすべてが獲得するような必然性を意味する。これは被造物のもつ現実存在に対応し、質料と形相という二元性を表現してもいる(62)。さらにグンディサリヌスによれば、質料と形相はそれぞれ単独では可能存在をもつにすぎないが、両者は結合されることではじめて(上記の三つ目の意味での)必然存在をもつ。この考えは形相がもつはずの現実態としての側面を等閑視している。本書のクライマックスでも取りあげられるこの点について著者は、形相は存在に関しては現実態としての役割をほとんど果たさないのに対して、代わりに一性や実体性の形相という複数の形相が一性や実体性をもたらす現実態として機能していることを強調する(68)。実体形相複数説もグンディサリヌスに特徴的な考えである。

第2章「基本仕立てを造形し直す：グンディサリヌスとラテン伝統」は、ラテン伝統のなかでグンディサリヌスが受けた影響について論じる。中世において誤って『一性と一について』の著者だと言われることもあったボエティウスとは、純粋な一性をもつ神と複合的な二元性をもつ被造物の根本的な区別という考えを共有している。プラトンの『ティマイオス』をラテン語訳し注解も有名なカルキディオウスとは、神の見えざる業を見出すための認識論的な手段として、結果から原因に上昇する還元(*resolutio*)と原因から結果に下降する複合(*compositio*)という手法を共有している。次に、グンディサリヌスへの影響力がより強いシャルトル学派(シャルトルのティエリやコンシュのギヨーム)とは全般的に、数秘術的な側面と、三位一体における父、子、聖霊がそれぞれ質料の創造、形相の創造、その両者の合一に関わるという考えを共有している。原初的な混沌の存在をめぐっては、それを容認するサン・ヴィクトルのフーゴーやペトルス・ロンバルドゥスの神学的な立場よりも、それを否定するコンシュのギヨームのような哲学的な立場に与する。最後に、同時代人で主に天文学や占星術に関する著作の翻訳に従事していたカリンティアのヘルマンとは、『世界の流出について』で描かれる流出の全体像という枠組みを共有している。ただし、ヘルマンはあくまで『ティマイオス』に基礎づけられた12世紀の枠組みにとどまる一方で、グンディ

サリヌスは12世紀においてすでに13世紀のアリストテレス主義に近づいている。そこで次章以降は、その違いをもたらしたアラビア伝統からのグンディサリヌスに対する影響を論じていく。

第3章「実在を根づかせる：グンディサリヌスとイブン・ガビロル」は、イブン・ガビロルの『生命の泉』(*Fons vitae*)が与えた影響の大きさを論じる。本書のクライマックスがここから始まる。まずはイブン・ガビロルの思想そのものが論じられる。著者によれば、イブン・ガビロルの普遍質料形相論はそれ自体で、正反対の解釈を許容する。一つは「複合的」(compositional)解釈であり、事物を構成する諸要素である質料と形相を実在するものと見なす強い存在論的な主張である。もう一つは「分析的」(analytical)解釈であり、質料と形相はそれぞれ類と種を類比的に指示していると理解する弱い存在論的な主張である(146)。次に著者は、新プラトン主義的でアラビア伝統に即した宇宙論をもつイブン・ガビロルが抱いている最重要の形而上学的な諸原理を抽出する。「形而上学的な因果関係の諸原理」(PC)には、原因は常に結果よりも単純であること(PC1)、われわれにとってより明らかな実在はより真正な実在から派生したものであること(PC2)、より下位の次元で異なる二つの実在はそれらの原因であるより上位の次元では一致していること(PC3)、被造物によるあらゆる能動は質料に対して行われること(PC4)、質料と形相の複合体が完全に現実化するには形相が質料に対してはたらきかける必要があること(PC5)がある。「存在論的な構造の諸原理」(PS)には、一性と現実存在は同一であること(PS1)、質料と形相は相互依存関係にあること(PS2)、質料と形相の合一による複合体は第三のものであること(PS3)、複合体において実体形相は類を種に特定化すること(PS4)がある(148-50)。著者によれば、これら諸原理のいくつかを組み合わせるとイブン・ガビロルの思想には問題のある含意が存在していることがわかる。PC1-3とPS4にもとづく、例えば物体は、より下位の次元においては可感的な形相と複合する質料である一方で、より上位の次元においては普遍的な霊的質料と複合する形相(物体性の形相)であることになる。このように同じものが質料にも形相にもなるということを「複合的」解釈で理解するならば、それは質料と形相が相互に依存しているとするとPS2と矛盾する。質料と形相が一義的ではなくなるからである。他方で、「分析的」解釈であればそうした矛盾は生じない。質料と形相はあくまで類比的なものだからである。だがこの解釈を推し進めることは普遍質料形相論をそもそも否定することになる。質料と形相そのものをもはや実在の構成要素として見なすものではないからである(152-54)。

そこで著者は、中道を行く解決策として「機能的」(functional)解釈を提示する。PS1とPS3を重視するこの解釈によれば、現実化された複合体において質料と形相はもはや構成要素ではなく存在論的なアスペクトにすぎない。複合する

前は質料と形相を構成要素として考えることは可能だが、複合した後に現実化する複合体はもはや質料と形相とは異なる第三のものであり、その場合に複合体は質料と形相の単なる和ではもはやない。このことを著者はスマイレ色（紫）を例にして考える。青と赤を混ぜ合わせた結果として生じるスマイレ色は青でも赤でもない。青と赤からもはや別の事物になったからである。さらに、青と赤ももはや構成要素として分解ないし抽出できるようなものではなく、スマイレ色のアスペクトとして複合体の内部にのみ存在している。このアスペクトが可能態と現実態、質料性と形相性、類と種というさまざまな機能に対応することになる。この「機能的」解釈は、質料と形相が実在することを保持する一方で、それらが類や種を含むさまざまな機能を場面に応じて果たしていると理解することにより、「複合的」解釈と「分析的」解釈を同時に救おうとする（154-55）。

第3章の後半は、グンディサリヌスが初期から後期にいたる円熟に応じて徐々に著者の言うような「機能的」解釈を受け入れていく過程を論じる。『一性と一について』ではほとんど「複合的」解釈にとどまっていたグンディサリヌスは、アヴィセンナやロンバルドゥスからの影響で諸天使による二次的な創造という考えを導入することにより、『魂について』では「分析的」解釈を本格的に採用し始める。第一質料と第一形相が神によって無から創造された後に、段階的に創造されていくさまざまな種の質料形相論的な構成を論じる必要があったからである。普遍質料形相論を根にしてポルフェリオスの樹が育てられていく。そして『世界の発出について』にいたってグンディサリヌスは「機能的」解釈を採用する。その見極めは主として、形相がそれ自体では可能態にあるものにすぎないという点を積極的に考慮していることにもとづく。グンディサリヌスによれば、質料も形相もそれ自体は「質料的な存在」(esse materiale)をもつが、それらは合一すると「形相的な存在」(esse formale)をもつ(195)。グンディサリヌスの思想的な深まりがイブン・ガビロルに対する理解の成熟と重ねられている。

第4章「存在を査定する：グンディサリヌス、アヴィセンナ、イブン・ダウド」は、グンディサリヌスがイブン・ガビロルから受け取ったさまざまな考えがアヴィセンナ（の特に『第一哲学』(Philosophia prima)）との出会いで変容したことおよびそれにおけるイブン・ダウドからの影響を論じる。グンディサリヌスの同僚でもあったイブン・ダウドにはアヴィセンナの影響が顕著であるが、著者はそのことを『高貴な信仰』(al-'Aqidah al-Rafi'ah)によって確認し、第1章で見た様相存在論もそのようにしてグンディサリヌスに受容されたとする。形相が単体では可能態にあるものにすぎないという点は、様相存在論においては可能存在であることを意味している。ただしアヴィセンナやイブン・ダウドは物的な質料形相論のうちにとどまっているのに対して、グンディサリヌスは普遍質料形相論のなかでアヴィセンナを受容する点が異なる。さらに、形相それ自体にほと

んど現実態性を認めない点や実体形相複数説を採用している点もアヴィセンナと異なる。グンディサリヌスの存在論は次のような表にまとめられる (240)。

様相存在論	現実態と可能態	普遍質料形相論	存在
自体的な必然存在	現実態と可能態のかなた	質料と形相のかなた	[絶対的な存在]
可能存在	存在の可能態	未合一の質料と形相	質料的な存在
他のものによる必然存在	現実存在	合一された質料と形相	形相的な存在

第4章の最終節は、イブン・ガビロルに対して批判的だったイブン・ダウドにグンディサリヌスが配慮していたかどうかを検討する。様相存在論の導入に関してはそのことを認める余地があるものの、イブン・ダウドとグンディサリヌスの宇宙論を比較すると相違点が目立つ。グンディサリヌスの宇宙論は、質料から始まり、二次的な原因として天使、天球、元素を登場させるものの、それらが生成する過程を明確化しない。それに対してアヴィセンナの影響が強いイブン・ダウドの宇宙論は、天球を動かす第一天使から始まり、形相付与者 (dator formarum) と月下界にまでいたる生成のありようを明確に述べる。質料は月下界のみ登場する (259-60)。それでも著者は、グンディサリヌスがアヴィセンナとの調和を図ってイブン・ガビロルに対する理解を変えていったことを、トレドにおける同僚たちとの知的な交流の結果として肯定的に評価する。ラテン中世におけるアヴィセンナの本格的な受容がこれに続くことになる。

結論「一性から二元性へ」は、全体の振り返りをしたうえで、グンディサリヌスの著作が及ぼした後世への影響を論じる。誤ってボエティウスに帰されたゆえに広く流通した『一性と一について』は、その著者性について慎重だったトマス・アクィナスを除いて、ボエティウスの諸著作とともに比較的よく読まれた。『世界の発出について』は、主として英国のスコラ学者によく受容された。著者はまた、ディナンのダヴィドが自らの極端な唯物論によって断罪されたのと同じ1210年および1215年の禁令がグンディサリヌスの学説をも対象としていた可能性に言及するが、最終的な解答は差し控えている。グンディサリヌスの後世への影響についてはさらなる研究の進展が期待される。

さらに評者のコメントを付け加えるなら、グンディサリヌスの思想についても本書があらゆる問題を解決したわけではない。第1章の内容に関わることとしていくつか指摘するだけでも、普遍質料形相論では魂の不滅性はどのように説明されるのか (43n93)、《intelligentia》は分離実体なのか内在的な能力なのか (46-47)、形而上学の対象が非質料的であることと普遍質料形相論は両立するのか (50n118) という問題は未決である。そして何より重要なのは、第3章において提示されたイブン・ガビロルに対する「機能的」解釈の是非である。これは本書

の範囲を超えることではあるが、アリストテレス的な質料形相論から派生した普遍質料形相論がアリストテレス哲学ないし形而上学の理論としてそもそも整合的なものなのかという大きな疑問がある。ただし、もしかしたらこのような問題意識をもつことは時代錯誤なのかもしれない。グンディサリヌスにとってはおそらく、最新の翻訳により明らかになったイブン・ガビロルの哲学的な体系を目の前にして、同僚たちと議論しながらそれを自らが納得できる思想としてどのように受容するのが重要だっただろう。翻訳と哲学を連動させているグンディサリヌスを前にして、『生命の泉』の日本語訳をもたない私たちにとっては、グンディサリヌスがかつて行ったことを容易には追体験できない状況が続いている。こうした状況の打破に評者も貢献したい。